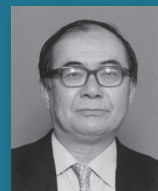


「イスラエル建国史」

17 第1次世界大戦の影響(2)

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

◆第1次世界大戦でトルコが同盟国側に立って宣戦を布告すると、パレスチナにいた連合国出身のユダヤ人は、国外追放処分となった。ロシア出身の軍人トルンペルドールもその一人であった。パレスチナを追放されたトルンペルドールはその後、ロシア紙特派員ジャボチンスキーと出会い、「ユダヤ人部隊を編成し、英仏軍を支援してトルコをパレスチナから駆逐する。その見返りは、戦後の独立である」というジャボチンスキーのユダヤ軍団構想に意気投合し、計画の実行を目指す。しかし、提案を受けた英軍の反応はそっけなく、実戦部隊ではなく、兵站線を守る補助隊としてしか編成を認めないというものだった。ジャボチンスキーは意気消沈するが、トルンペルドールは実績を積むことがその後の展開につながると考え、英軍の条件を受け入れた。



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。
早稲田大学第一文学部卒業。
イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。



英軍撤退直前のガリポリのヘレス岬

シオン驃馬隊の編成



シオン驃馬隊

1915年3月22日、英・エジプト外征軍（EEF）の植民地隊、通称シオン驃馬隊が、編成を完結した。隊長はジョン・ヘンリー・パターソン中佐、副隊長がトルンペルドール大尉、隊員定数500。職種は補助職にあたる輸送隊であった。仕事は、驃馬を使った前線への弾薬、食糧および水の補給であったが、復路は負傷兵の搬送にもあたったから、衛生隊の補助役も果たした。

隊長のパターソン中佐は、アフリカとインド勤務が長く、ブール（ボーア）戦争従軍の経験を持つ、キリスト教徒の英軍将校であった。シオン驃馬隊の指揮経験で、パターソンは熱烈なシオニズム支持者になる。



パターソン中佐

3月31日、アレクサンドリアのユダヤ人社会が主催して、ユダヤ人部隊の出征式が、ガバリで行われた。式典ではラビのラファエル・ペルゴラ教授が歴史的意義を称え、イスラエル・ザングウィルから寄せられた激励電報が読みあげられた。隊は3週間の短期基礎訓練を受けた後、2隻の船に分乗し、4月17日にアレクサンドリアを出航した。行き先は激戦地ガリポリ半島である。

ガリポリ上陸作戦

ヨーロッパ側トルコ領のガリポリ半島は、ダーダネルス海峡の出入り口に位置し、地中海から黒海へ向かう船舶は、必ずここを経由してマルメラ海へ入り、さらにボスポラス海峡を通過しなければならない。この半島にクサビを打ちこみ、北上してボスポラス海峡を制圧すれば、同盟国側は分断され、連合国側は、地中海から黒海を経由してロシアに軍事支援をすることもできる。このような意図で実施されたのが、ガリポリ上陸作戦（ダーダネルス海峡戦）である。

4月27日、砲撃音の轟くなか、シ

オン驃馬隊は、半島南端レヘス岬の西海岸に上陸した。出航して10日もかかっている。この間いろいろなことが起きた。隊が200と300に二分され、前者はANZAC（オーストラリア・ニュージーランド）軍に配属された。パターソンやトルンペルドールのような事情の分かった指揮官がいず、しかも隊員は英語がしゃべれないので、意思の疎通を欠いた。結局こちらの隊は間もなくエジプトへ戻されてしまう。もう一つの隊は、搭乗船が座礁し、ほかの船への移乗で時間がかかった。しかも、揚塔司令部の不手際で、上陸に3日もかかり、せっかく陸に揚げた驃馬は砲弾の爆発に驚いて逃げまわり、收拾がつかなくなった。

ガリポリ上陸作戦は結局失敗した。8カ月に及ぶ激戦の連続で、英・ANZAC軍とフランス軍を主力とする連合軍、そしてトルコ軍を主力とする同盟軍は、それぞれ25万の損害をだす結果になった。連合軍は



ダーダネルス海峡戦

1915年末に撤退を決意する。実際は敗退である。それに伴って、シオン驃馬隊にも12月28日付で解散命令がでた。1カ月前パターソンが病気になってアレクサンドリアに後送されたため、トルンペルドールが隊の指揮をとっているところであった。

補充隊(カイロ隊)と 隊長パターソン中佐

シオン驃馬隊には合計650人が志願で入隊し、うち562人がガリポリ戦に投入された。激しい砲撃下での輸送で、隊員が小銃を携行していたことから分かるように、戦闘にまきこまれることもあった。8カ月間の派遣中戦死14人、負傷60人余をだしている。トルンペルドールも、12月に左肩を撃ち抜かれた。襲ってくるのは敵兵や弾だけではない。夏は無数のハエと炎熱、冬は烈風と寒気と雨にさらされた。

差別もあった。トルンペルドールは将校でありながら、士官食堂の入室を禁じられ、認められても英・ANZAC軍将校との同席を許されなかった。隊員の給与は同じ職種の兵の半分であった。戦死者遺族に対する年金も認められなかった。軍上層部は、臨時雇いの労務者と考えていたのである。

7月末になると、負傷や病気で、任務につける隊員数が半減してしまった。隊員の補充のためカイロに戻ったトルンペルドールは、当地のユダヤ人社会から激しい批判を浴びた。命がけの仕事であるのに、労務者扱いをされるだけでなく、差別される。そもそも労務作業が聖地解放と関係があるのか、と住民たちは問うた。

それでも、この時150人の若者が志願入隊し、この補充隊はカイロ隊と名付けられた。労務者扱いされ、屈辱感を味わっているはずの隊員た

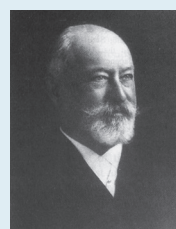
ちに、別の表情を読みとった人もいる。隊長のパターソン中佐である。民族の再興にける高い志を見た中佐は、人生意気に感じる人であった。やがて中佐が重要な役割を果たす時が来る。

疲弊するパレスチナの ユダヤ人社会

戦時中パレスチナのユダヤ人社会は、追放と流出で人口5万6000台に減少し、軌道にのり始めた開拓事業も中断状態になった。その人口構成は、海外ユダヤ人社会の寄付(ハルカー)で生活する旧世代、農業で生きる開拓民であったが、戦争になると送金はすぐに止まり、農産物の主力である柑キツ類とワインの販路がなくなり、住民はたちまち生活に困窮した(1915-16年には蝗の大群が襲って農作物に壊滅的打撃を与えた)。

1914年8月31日、コンスタンチノーブルの駐トルコ・アメリカ大使ヘンリー・モーゲンソー(1856-1946)のもとに、ヤッフォのパレスチナオフィス所長アルトゥール・ルッピン(1876-1943)が、ユダヤ人社会の窮状を訴えてきた(ルッピンは、開拓事業の推進で、シオニスト kongress から派遣されていた)。このままでは餓死者がでるという。驚いたモーゲンソーは、アメリカ・ユダヤ人救援委員会(AJRC)に電報をうった。モーゲンソーは、シオニズムを支持せず、むしろ反対する立場にいたが、同胞の窮状に心を痛めていた。ウィルソン大統領も

1913年に本人を大使に任命する時、「あなたの同胞の境遇を改善するために、あなたが行うことは、アメリカにとって名誉ある行為である」と言っている。大統領のこの言葉が後押しした。



ヤコブ・シフ

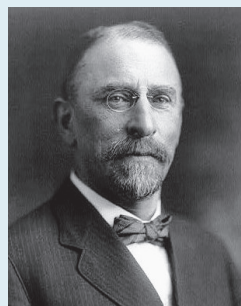
救援委員会は、ヤコブ・シフ(前出)を中心に対応を協議し、救援金5万ドルを集めた。その金は、モーゲンソーの義理の息子モー

リス・ヴェルトハイムがアメリカの軍艦ノースカロライナ号に便乗し、10月6日に現地へ届けた。1915年3月には、10万ドル分の救援物資(食糧、医薬品など計900トン)と現金150万ドルが、アメリカの給炭船バルカン号に託して送られた。

アメリカのユダヤ人社会からの救援は数回行われたが、それもアメリカの参戦で不可能になった。

余談になるが、第1次世界大戦が勃発した時、アメリカのユダヤ人社会には、困窮同胞を支援する団体が2つ生まれた。前述のアメリカ・ユダヤ人救援委員会(AJRC)と中央救援委員会(CRC、正統派)である。この2組織は1914年11月27日に合併し、さらに翌年初めに労働者と社会主義者の設立した人民救援委員会(PRC)がジョイントして、アメリカ・ユダヤ人合同配分委員会(JDC・通称ジョイント)が生まれた。ジョイントは世界有数の救援機関に発展し、ユダヤ人非ユダヤ人を問わず、自然災害や紛争の被害者の救援を今日も続けている。

American Jewish
Joint Distribution
Committee



ヘンリー・モーゲンソー

現地パレスチナは、ユダヤ人追放が続く一方で、トルコ第4軍の前線基地となり、住民は陣地構築、軍用道路の建設に動員された。さらにトルコ軍は、スエズ運河攻略用の軍隊と軍用資材の輸送を目的に、ベエルシェバから北シナイまで264キロの鉄道建設を意図し、住民は労務提供を命じられ、すっかり疲弊した。そしてそのパレスチナ自体が、すぐに戦場になってしまうのである。